

# ことわざミニマムとことわざスペクトル<sup>1)</sup>

鄭 芝 淑・飯 田 秀 敏

## 1. 比較ことわざ学

異なる文化のことわざを比較することは、古くからことわざ研究者が強い関心を寄せてきた課題の一つであった。どの文化にもことわざと呼ばれる定型表現があるので、自分の母語以外の言語のことわざに接すると、人は自然にそれを母語のことわざと比べるようになる。それは、ことわざが単なる定型句ではなく、民衆の知恵や教訓を巧みにかつ簡潔に表現したものであるために、特に人の関心を引くためであろう。多少なりともことわざに関心を持つ人が他文化のことわざを知ることになれば、無意識的に母語のことわざとの比較の姿勢が生まれるものである。したがって、異なる文化のことわざ比較はことわざへの関心が生じたときからあったと思われる。現在でも比較に対する関心は旺盛である。韓国の国会図書館 (<http://www.nanet.go.kr>) には 2007 年 6 月の時点でことわざ関係の学位論文が 194 点登録されているが、そのうち 59 点 (30.4%) は、韓国語のことわざと日本語、中国語、英語など他の言語のことわざとの比較を試みたものである。これは、ことわざ比較への関心がかかなり高いことを示している。これは決して韓国だけの特異な傾向ではないであろう。他の言語に関する比較可能なデータがないので推測に過ぎないが、異なる文化のことわざとの比較への関心には、文化差はあまりないのではないかと思われる。

各文化のことわざ研究の中心的課題が、ことわざの特徴は何かという問いに答えることであるとすれば、その結果として得られる知見は、他の文化のことわざ研究の成果と比べ合わせることによってより明確化される。したがって、異なる文化のことわざ比較は、ことわざ研究にとってかなり重要な意味を持つ課題であると言わざるを得ない。しかしながら、ことわざの比較研究は強い関心に留まっているという感は否めず、歴とした学術研究分野として確立されているとはいえないのが実情である。上に挙げたことわざ比較関係の論文にしても、そのほとんどは修士論文であり、それ以上のレベルのものはほとんどない。

異なる文化のことわざ比較がことわざ研究において重要な課題であり、またそれに対してかなりの関心が寄せられているながら、「比較ことわざ学」なる学術研究分野の確立に至っていない理由はどこにあるのか。それは、端的に言えば、方法論の欠如ということになると考えられる。ある学術研究分野が確立されるためには、研究の対象、方法論、

研究の目的・意義などが明確になっていなければならない。このうち、最も重要なのが方法論である。学術的比較は厳密な手順に従ってなされなければならない。厳密な比較の方法論に拠らずに単純に対象を比較した結果は、どんなに興味深い主張であろうが説得力を持ち得ない。説得力のある主張を導き出せない分野は学術研究分野として認められない。従来のことわざ研究がまさにこのような状況ではなかったかと思われる。「比較ことわざ学」という学術分野を確立するためには、ことわざ比較のための厳密な方法論を持つことが最優先の課題である。

ことわざの比較といっても様々である。最も単純なのは、異なる文化のことわざをそれぞれ1件ずつ選び比べ合わせその異同を論じる場合である。このような個別的なことわざの比較も、分析者の力量と分析の仕方によっては、深みと広がりを持った考察が可能であるかもしれないが、可能であるとすれば、それにはそれなりの方法論が必要である。しかしながら、どのように鋭い分析がなされたとしても、個別のことわざの比較によって明らかにできることには限界がある。それぞれの文化のことわざの類似点あるいは相違点の一面を明らかにするに留まらざるを得ない。また、そうした個別的、断片的な比較ことわざ研究の成果を蓄積しても、状況は本質的に変わらない。その成果は例えば韓日対照ことわざ辞典のような二言語ことわざ辞典である。多大な労力をかけて編纂される二言語辞典は、比較ことわざ学のための重要な資料を提供するけれども、それ自体が比較ことわざ学を確立する決定的要素にはなり得ない。それは、韓日辞典が韓日対照言語学を確立できないのと同じことである。

比較ことわざ学の主たる目標は、個別的なことわざ比較やその蓄積ではなく、異なる文化のことわざを総体的に比較することである。つまり、それぞれ文化のことわざの「集合」が持っている様々な特徴を分析し、それらを比較対照させることによって総体的、一般的な異同を明らかにすることである。比較の対象が「個」から「集合」へと変われば、比較という作業の性格も根本的に異なってくる。個別的な比較をする場合には考える必要もない条件を満たさなければならなくなるからである。

異なる文化のことわざの総体的比較が目標として定まれば、次に考えるべきことは「総体」をどのように捉えるかということになる。言い換えれば、比較すべきことわざ群をどのように画定するかということである。これは比較ことわざ学のための方法論の出発点であるが、その重要性について従来の比較の試みにおいてはほとんど関心が払われていなかったのである。もちろん、どのようなことわざ比較の試みも比較対象ことわざ群の画定に基づいて行われてきた。しかし、その手続きはあまりにも便宜的であり素朴で、結論の信頼性を保証するにはあまりにも不十分であったと言わざるを得ない。

ことわざの総体的比較をする場合、比較の対象となることわざ群は、少なくとも「代表性」と「同等性」の条件を満たさなければならない。「代表性」の条件とは、比較対

象として選定されることわざ群は当該文化のことわざのうち代表的なものでなければならないということである。ある文化のことわざについて多少なりとも一般的な考察をするためには、その考察の対象が特殊なもの、つまりほとんど誰にも知られていないようなことわざであってはならないからである。従来の比較ことわざ研究では、この条件はほとんど考慮されてこなかった。最も一般的に用いられていた方法は、「権威のある」ことわざ辞典を1点あるいは複数点選び、そこに収録されていることわざを対象ことわざ群とする方法である。このような画定方法がほとんど無批判的に受け入れられてきたのであるが、方法論的な観点からすれば粗雑極まりない方法である。ことわざ辞典の権威や定評は収録されることわざの代表性によるものではない。意味解釈の適切さ、出自記述の確かさ、類似ことわざや反対ことわざの指摘の確かさなどによって定評があり権威を認められているのである。「権威・定評のある」ことわざ辞典は、往々にして数千件に上るような多数のことわざを収録している。その大多数は、当該文化の成員のほとんど誰にも知られていないような特殊なものであり、決して代表的なことわざには値しない。そのようなものをすべて含めて比較対象ことわざ群とすることがいかに目標にそぐわない方法であるかは、少し考えれば自明のことであるにもかかわらず、これまでまったく意識されてこなかった。自分の母語のことわざについては、直感的にある程度代表性の問題をクリアできる。しかし、それは厳密な手順にはなり得ない。母語文化以外の文化のことわざについては直感すら働かない。

「同等性」の条件とは、比較対照される2つのことわざ群は、その規模においても内容においても、同等の性質を持っていることが保証されなければならない、ということである。学術的比較にとっては当然すぎるほどの条件である。特殊な例を挙げれば、その重要性は明らかである。例えば、韓国人と日本人の身長を比較する場合、韓国人については成人男子100名を対象とし、日本人については女子中学生10名を対象としたのでは、測定が厳密に行なわれ集計が適切に行なわれたとしても、両者を比較することから何ら意味のある結果を導き出すことはできない。比較対象群のサンプリングの方法、個数、属性について同等性を保証しなければ意味のある比較はできない。ことわざの比較についても同様である。特定のことわざ辞典に基づいて対象群を確定するという従来の方法では、この同等性の条件は完全に無視されており、また意識されていたとしてもそれを克服する有効な手立てはない。

代表性と同等性の条件を満足させる比較対象ことわざ群を画定する手順を打ち立てること、これが比較ことわざ学の確立にとってまず解決しなければならない課題である。

## 2. ことわざミニマム

対象ことわざ群の選定の問題に関して、現在、ことわざ研究において重要なトピック

の一つとなっている「ことわざミニマム」(Paremiological Minimum) という概念が興味深い。これはロシアのことわざ研究家 G. L. Permiakov の発案によるもので、ロシア語を学ぶ外国人がロシアの文化を知るための必須のことわざを選定しようとしたことに始まる。Permiakov は、300 人のモスクワ住民を対象とした調査によって、すべての回答者が知っていると答えた約 1,000 件のロシア語のことわざおよびことわざ的慣用句を抽出し、このリストを「ことわざミニマム」と呼んだ。Permiakov (1985) ではそのリストを 300 件にまで凝縮した。その後、これが欧米のことわざ研究家の注目するところとなり、特にことわざ研究の世界的権威である W. Mieder の著書・論文や彼の編纂による論文集、彼の主幹する国際的事ことわざ研究誌 *Proverbium* に掲載された論文において様々な言語のことわざに対してこの概念が適用され、発展が試みられている。それは、明らかに教育的な動機付けを持って発案されたものであるが、現在では文化リテラシーの一環として位置付けられており、ある文化を理解するために必要不可欠な知識の一部であるとみなされている。ことわざミニマムの定義としては、Doctor (2005: 51) による次の定義が最も簡潔にして要を得ているだろう。

a basic set of proverbs which are current and prevalent at a given time within different generations of a given culture and which in terms of recognition frequency as well as citation rate are the most prevalent

ことわざミニマムの概念は、ことわざ比較とは無関係に発案され、現在もその課題との関連性は希薄である。しかしながら、Mieder (1994: 307) の次のような記述からはことわざ比較への指向性が窺われる。

Once national paremiological minima are established we will also be able to determine the most frequently used international proverb types through comparative proverb collections . . . Such work will eventually lead to an international paremiological minimum for the world's proverbial wisdom.

ここに指向されているのは国際的事ことわざミニマム、つまり普遍性・共通点であるが、普遍性・共通点と個別性・相違点とは表裏一体の関係にある。異なる文化のことわざの比較を通じて相互の異同を明らかにすることを目指す比較ことわざ学と本質的に係わる概念であることを強く示唆している。ただし、そのためには、個別性・相違点の解明にとっても適するようにことわざミニマムの概念を再検討する必要がある。

ことわざミニマムの研究はまだ歴史が浅く、具体的な提案はごく僅かしかない。

Permiakov のロシア語のことわざミニマム他に、Mieder は英語版でこれに匹敵するものとして Hirsch et al. (1988) の 265 件のリストがあると言い、Mieder (2004: 129-130) 自身も 75 件のことわざを選定している。ただし、これらについてはどのように選定されたか、その手順については明らかではない。Mieder (1994) は、想起式調査による選定、認知度調査による選定、頻度調査に基づく選定などの方法について触れているけれども、ことわざミニマムを選定するためには大規模で入念なアンケート調査が必要であると述べているだけで、どのような調査をしてどのようにことわざミニマムの選定に至るかの具体的手順については言及がない。ことわざミニマムの具体的な選定の試みとしては、英語のことわざに関する Lau (1996) の試み、ハンガリー語のことわざに関する Tóthné Litovkina (1996)、インドの Gujarati 語のことわざに関する Doctor (2005) の試みなどがある。これらの試みは、対象言語ばかりでなく、目標やことわざミニマムの画定手順において異なっており、ことわざミニマムの性質を考える上でも、またそのことわざ比較との関連を考える上でも重要な手がかりを与えてくれる。

Lau (1996) は大規模なジャーナリズム英語のコーパスである Lexis/Nexis ALLNWS を用いた頻度調査に基づき、アメリカのメディアで最も多用されることわざ 10 件を抽出し、それらに基づいて現代のアメリカ的価値観 (contemporary American values) を分析している。手順は 2 つの段階に分けられる。まず第 1 段階では、英語のことわざから、Permiakov のことわざミニマムの規模に相当する約 300 件を選んでいる。選定の手順は、Whiting (1989) に収録されていることわざのうち「自己充足的な」(self-contained) もので用例の多いものから 315 件を選び、さらに、その 315 件のことわざが *The Oxford Dictionary of English Proverbs* (1970) など 3 点の代表的なことわざ辞典に収録されているかどうかをチェックし、そのすべてに収録されているもの 188 件を最終リストとした。第 2 段階で、最終リストの 188 件のことわざをコーパス調査し、表 1 のような結果を得た。用例数の最も多い上位 10 件を選び、それらのことわざの意味内容を分析することによって、現代アメリカの支配的価値観に「時間」の概念が深く係っていることを論じている。

Lau の調査の主たる目的は最も多用される少数のことわざの抽出であるが、それに至る手順や得られた結果を見ると、その背後にことわざミニマムの概念があることは明らかである。

Tóthné Litovkina (1996) は、かなり大規模なアンケート調査によってハンガリーのことわざミニマムの抽出を試みている。手順は 3 つの段階に分けられる。第 1 段階では、30～50 名の回答者に約 4,000 件のことわざを示し、それらのことわざを知っているか知らないかを問い、50% 以上の回答者が知っていると言ったもの 930 件を予備調査資料として選んだ。第 2 段階 (予備調査) では、22 名の回答者を対象として、その 930 件の

表1：Lau (1996) の調査リストの用例数別分布

用例数	件数	累計
10,000～	3	3
5,000～9,999	1	4
1,000～4,999	10	24
500～999	14	38
100～499	41	79
50～99	22	101
10～49	42	143
2～9	26	169
1	2	171
0	17	188

表2：ことわざ別の正答率分布

Tóthné Litovkina (1996)		
正答率	件数	比率
100%	1	0.3
99%以上	17	4.5
95%以上	106	28.0
90%以上	158	41.8
80%以上	228	60.3
50%以上	359	95.0

ことわざの各々の始めの部分だけを示しそれを完成させるという形式（後半部補充式）の調査を行い、その結果50%以上の回答者が正答したことわざ378件を本調査資料として選定した。第3段階（本調査）では、予備調査によって得られた378件のことわざに関して、やはり後半部補充式テスト形式の調査用紙を作成し、これをハンガリー全国に配布し、418部が有効回答として回収された。回答に当たっては、他人の助けを借りないこと、ことわざ辞書を参照しないことを条件付けている。その結果、表2に示すような正答率の分布を得た。また、正答数と回答者の属性（年齢、性別、学歴、居住地域、成長地域、親の学歴など）との関係を分析している。

Tóthné Litovkina は、ハンガリーのことわざミニマムがどの程度の規模のものであるかについては明言していない。しかし、表2のような正答率分布の結果から、必要に応じてその規模を定めることを示唆しているのではないかと考えられる。

Doctor (2005) はコーパス調査とアンケート調査を併用してインドの Gujarati 語<sup>2)</sup> のことわざミニマムの抽出を試みている。手順は3つの段階に区分される。第1段階では、Gujarati 語のコーパス（3百万語規模で、話し言葉、書き言葉の両方を含む）から722件のことわざを拾い出し、そのうち出現度数3以上のもの177件を原資料とした。第2段階で、原資料を52人の Gujarati 語母語話者（30歳以下18人、30～59歳20人、60歳以上14人）に提示し、原資料には含まれていないが、自分がよく使うか周りでよく使われていることわざを追加させた。その結果、22件のことわざが追加され、分析資料を199件とした。最後の第3段階で、52人の回答者に対して、この199件のことわざの各々が次のどの類に属するかを問う調査を行った。

- ① 自分も知っていてよく使うし、周囲でもよく使われている。
- ② 自分は知っているがあまり使わない。しかし、周囲ではよく使われている。
- ③ 自分は知っているが使わない。しかし、周囲ではよく使われている。
- ④ 自分は知っているが、周囲であまり使われていない。
- ⑤ 自分は知っているが、使われるのを聞いたことがない。
- ⑥ 自分もまったく知らないし、使われるのを聞いたことがない。

回答を集計した結果（ただし、集計方法については詳しく述べられていない）、①、②に相当すると考えられる Class 1 のことわざ 59 件、③に相当する Class 2 のことわざ 21 件、④に相当する Class 3 のことわざ 19 件、合計 99 件のことわざを抽出し、このうち Class 1 のものを「真のことわざミニマム」(true paremiological minimum) と規定している。

以上 3 つの試みからわかるように、ことわざミニマム選定は、規模においても選定手順においても、暗中模索、手探りの状態にある。ことわざミニマム選定の目的が、当該文化の範囲内に留まっている限りは、結果が満足のいくものであればどのような手順によって選定されようがさして問題はない。しかし、Mieder が述べているように、ことわざミニマムが特定文化の範囲を超えて普遍性・共通点を探ることを指向するならば、規模や手順の標準化、規格化を図らなければならない。同等性のないことわざ群を比較してみても、説得力のある結論は得られないからである。

上に紹介した 3 つの選定の試みを手順の規格化の観点から考えてみよう。Lau と Doctor の手順はコーパスの利用による頻度調査に基づいている。コーパス調査は客観的で確実な方法のように思われがちであるが、ことわざの選定の目的のためにはいくつかの重大な問題点がある。第一に、大規模なコーパスがどの言語にも開発されているわけではないことが、規格化への大きな障害となる。しかし、この問題は現時点でそうであるということにすぎず早晚解決されると思われる。第二の問題は、コーパスの設計に関わるものである。ことわざを含むテキストにそれを示すタグが付けられていれば、比較的短時間にコーパスに含まれることわざの用例のすべてを拾い出すことができ、全体の頻度分布を知ることができるであろうが、通常、コーパスはそうに設計されていない。したがって、ことわざを一つ一つ取り上げ用例を調査しなければならない。ことわざには異形があり、また実際の用例ではかなり多様に形を変えることもあるので、そのすべてを拾い出すためには非常に手の込んだ操作を行う必要がある場合が多い。これを多数のことわざについて行うとすれば、予想をはるかに上回る時間と労力を要する。そこで、頻度数が高いと予測される一定数のことわざに限って調査をすることになるが、ここに選定者の主観が入り込む余地が生じる。選定者の主観が入り込む恐れのある手順

は規格化にはなじまない。第三に、これがある意味で最も重大な問題点であるが、コーパス調査の結果得られる用例数分布には顕著な偏りが見られるため、特定の目的のためのことわざ群の選定には信頼性が低いことである。これは Lau の調査結果（表1）に端的に現れている。用例数が1万例を超えるものがある一方、用例の見つからないものが17例もある。Lau の利用したコーパス Lexis/Nexis ALLNWS はおそらく数億語規模のものと思われるが、それをういて、使用頻度が高いと予想された188件に限って調査した結果がこれであるから、有効性、信頼性はかなり低いと考えざるを得ない。Lau の目的は10件というごく少数のことわざを選定することであったから問題はないけれども、200件、300件規模のことわざミニマムを選定する場合には、信頼性はまったくないと言っても過言ではない。少し文献調査を試みればわかることであるが、ことわざが文献に現れる頻度は意外なほど低い。しかも、どの文献を資料とするかによって用例数の分布は大きく影響される。どれほど大規模なコーパスであっても、実際の言語使用量からすればごく微小な部分に過ぎないことを考えれば、頻度調査によってことわざの重要度を測ることが不合理な方法であることは理解できるだろう。コーパスがことわざの調査に極めて有効である場合も確かにあるけれども、あらゆる場合にそれが有効であるとする素朴なコーパス神話は捨て去られるべきである。

Lau の手順では、コーパス調査の対象とすることわざを選ぶために、ことわざ辞典調査を行っている。特定の辞典を利用してことわざ群を選定するという方法は、厳密な手順の規格化になじまないばかりでなく、最終的に選ばれるべきことわざが途中の段階で不当に排除されてしまうという致命的な問題を抱えている。Lau が調査資料として用いた辞典はすべて「権威・定評」のある辞典であるが、すでに述べたように、ことわざ辞典の「権威・定評」は登録ことわざ群の確かさを必ずしも保証するものではない。

Tóthné Litovkina の手順は認知度調査によるものである。また、Dotor の手順でも最終段階で認知度調査を用いている。この方法は、どのような形が適当であるかは別として、規格化が可能である。しかし、この調査方法だけでことわざミニマムを選定しようとすれば Tóthné Litovkina の試みのように調査が大規模なものにならざるを得ない。規模を縮小しようとすれば、Dotor の試みのように他の方法で調査対象とすることわざ群の絞り込みを行わなければならない。

### 3. ことわざスペクトル

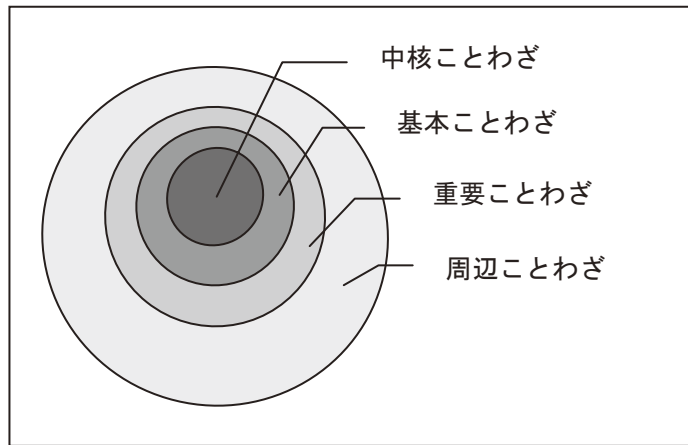
ことわざミニマムの概念は、ある文化のことわざ群が認知度や使用頻度において同等な性質のことわざの集合ではなく、よく知られているものとそうでないもの、よく使われるものとそうでないものとに区別されることを前提としている。この区分は、ある文化のことわざの総体の実態を把握する上で前進ではあるけれども、第一歩にすぎない。



ことわざの区分をミニマムと非ミニマムの二分法に留めなければならない理由がないからである。ことわざが非常によく知られ極めて頻繁に使われるものからごく一部の人にしか知られておらずほとんど使われることもないものまで段階的に分布することは、ことわざに多少なりとも関心がある者なら誰しも直感的に知っている。ことわざミニマムの概念の背後にもこの直感が窺えるのであるが、到達目標であるミニマムの選定ばかりに関心が寄せられているために、完全に無視されてしまったのである。上に述べたことわざミニマム選定の試みにおいて、いくつかの段階を経て絞り込みを行なっているのであるが、それはことわざが段階的に分布することを示唆しているのである。

どの文化にもことわざと称される定型表現が数多く存在する。その数は言語によって異なるであろうが例えば日本語のことわざ辞典の中には約4万5千件の収録件数を持つものがある。<sup>3)</sup>しかし、それらのすべてのことわざが、ことわざとして同一の資格を有しているわけではない。ことわざの認知度、使用頻度、定着度、ことわざらしさなどを総合してことわざの「重み」と呼ぶことにすれば、各文化のことわざの総体は「重み」の非常に大きいものから非常に小さいものまでスペクトル的に分布すると考えることができる。これを下の図のように、中核ことわざを中心として周辺ことわざまで広がる同心円スペクトルとして捉えれば理解し易いであろう。

図1：ことわざスペクトル<sup>4)</sup>



ことわざの総体をこのように一種のスペクトルとして捉えることによって、比較ことわざ学にとって何よりも重要な比較対象ことわざ群の選定への道が開かれる。対象ことわざ群に課せられる条件のうち「代表性」は、同心円スペクトルの中心部分を切り取ることにより満たされ、また「同等性」の条件は、異なる文化のことわざスペクトルの対

応する部分を切り取ることによって保証されるからである。

#### 4. PS リスト

それぞれの文化のことわざの総体が同心円スペクトルとして存在するという捉え方には問題はないであろう。また、ことわざのスペクトルの性質に依存して比較対象ことわざ群を選定するという発想も受け入れられるものであろう。しかし、ことわざスペクトルは光のスペクトルと同様アナログ的な実体であり、任意のかつ客観的な切り取りを可能にする切れ目があるわけではない。これを、比較ことわざ学の方法論に組み入れるためには、アナログの実体を切り取り可能なデジタルの実体、すなわち不連続なことわざの集合に変換しなければならない。ことわざのスペクトルの性格を反映したリストを「ことわざスペクトルリスト」(Paremiological Spectral List) 略して「PS リスト」(PS List) と呼ぶことにする。すると、問題は PS リストをどのように作るかということになる。

PS リストを作成する方法としては、様々な方法が考えられる。鄭芝淑(2007)およびそれに先行する一連の論文において、ことわざスペクトルを規定する要素である想起度、認知度、使用頻度の調査による作成方法と、それらを総合したことわざ辞典調査による方法とを検討した結果、少なくとも日本と韓国のことわざに関しては最後の方法が総合的に見て最適の方法であると結論付けた。<sup>5)</sup>

前述のように、単一のことわざ辞典は、それがどれほど権威があり定評のあるものであっても、比較対象ことわざ群の選定資料としては適切ではない。しかし、規模の異なることわざ辞典を多数集めそれを資料としてどのようなことわざが収録されているかを詳細に調査すれば、ことわざスペクトルを反映したリストが得られるのではないかと、というのがことわざ辞典調査による PS リスト作成の発想である。つまり、特定のことわざについてそれを収録している辞典の数を PS 度数とみなし、それによって順位付けられたことわざリストを作成するというものである。ことわざ辞典調査法にも種々の問題点があり決して十全の方法であるとは言えない。しかし、それらの問題点を勘案しても、日本と韓国のことわざスペクトルの性質を反映した PS リストを作成する方法として最適の方法であるとみなさざるを得ない。

日韓のことわざに関して、過去約 30 年間に出版された小・中規模(平均収録件数: 日本約 2,000 件、韓国約 1,500 件)のことわざ辞典それぞれ 30 点前後を資料として調査した結果、次頁に示すような度数分布を持つ PS リストが得られた。この PS リストに基づいて、鄭芝淑(2007)は語彙、形式的諸特徴に関して日韓のことわざを数量的に比較すると共に、従来は不可能であった異なる文化間のことわざ認知度の比較を試みた。

表3：度数別ことわざ件数の分布（PSリスト Ver. 2006）

日 本			韓 国		
度数	ことわざ件数	累計	度数	ことわざ件数	累計
43	7 ( 0.06)	7 ( 0.06)	28	3 ( 0.04)	3 ( 0.04)
42	25 ( 0.20)	32 ( 0.26)	27	23 ( 0.27)	26 ( 0.31)
41	31 ( 0.25)	63 ( 0.51)	26	25 ( 0.30)	51 ( 0.60)
40	20 ( 0.16)	83 ( 0.68)	25	33 ( 0.39)	84 ( 0.99)
39	22 ( 0.18)	105 ( 0.86)	24	39 ( 0.46)	123 ( 1.46)
38	19 ( 0.16)	124 ( 1.01)	23	46 ( 0.54)	169 ( 2.00)
37	29 ( 0.24)	153 ( 1.25)	22	35 ( 0.41)	204 ( 2.42)
36	25 ( 0.20)	178 ( 1.45)	21	41 ( 0.49)	245 ( 2.90)
35	41 ( 0.33)	219 ( 1.79)	20	51 ( 0.60)	296 ( 3.50)
34	36 ( 0.29)	255 ( 2.08)	19	48 ( 0.57)	344 ( 4.07)
33	34 ( 0.28)	289 ( 2.36)	18	51 ( 0.60)	395 ( 4.66)
32	26 ( 0.21)	315 ( 2.57)	17	62 ( 0.73)	457 ( 5.41)
31	29 ( 0.24)	344 ( 2.81)	16	60 ( 0.71)	517 ( 6.12)
30	31 ( 0.25)	375 ( 3.06)	15	73 ( 0.86)	590 ( 6.98)
29	32 ( 0.26)	407 ( 3.32)	14	77 ( 0.91)	667 ( 7.90)
28	42 ( 0.34)	449 ( 3.67)	13	108 ( 1.28)	775 ( 9.17)
27	29 ( 0.24)	478 ( 3.90)	12	105 ( 1.24)	880 (10.42)
26	34 ( 0.28)	512 ( 4.18)	11	154 ( 1.82)	1,034 (12.24)
25	46 ( 0.38)	558 ( 4.55)	10	181 ( 2.14)	1,215 (14.38)
24	63 ( 0.51)	621 ( 5.07)	9	245 ( 2.90)	1,460 (17.29)
23	59 ( 0.48)	680 ( 5.55)	8	292 ( 3.46)	1,752 (20.74)
22	73 ( 0.60)	753 ( 6.15)	7	307 ( 3.63)	2,059 (24.38)
21	64 ( 0.52)	817 ( 6.67)	6	340 ( 4.03)	2,399 (28.40)
20	82 ( 0.67)	899 ( 7.34)	5	372 ( 4.40)	2,771 (32.81)
19	75 ( 0.61)	974 ( 7.95)	4	454 ( 5.37)	3,225 (38.18)
18	109 ( 0.89)	1,083 ( 8.84)	3	709 ( 8.39)	3,934 (46.58)
17	125 ( 1.02)	1,208 ( 9.86)	2	1,123 (13.29)	5,057 (59.87)
16	115 ( 0.94)	1,323 (10.80)	1	3,389 (40.12)	8,446 (100.0)
15	120 ( 0.98)	1,443 (11.78)			
14	107 ( 0.87)	1,550 (12.65)			
13	127 ( 1.04)	1,677 (13.69)			
12	139 ( 1.13)	1,816 (14.82)			
11	157 ( 1.28)	1,973 (16.10)			
10	214 ( 1.75)	2,187 (17.85)			
9	227 ( 1.85)	2,414 (19.70)			
8	298 ( 2.43)	2,712 (22.14)			
7	357 ( 2.91)	3,069 (25.05)			
6	451 ( 3.68)	3,520 (28.73)			
5	611 ( 4.99)	4,131 (33.72)			
4	862 ( 7.04)	4,993 (40.76)			
3	1,147 ( 9.36)	6,140 (50.12)			
2	1,940 (15.84)	8,080 (65.95)			
1	4,171 (34.05)	12,251 (100.0)			

## 5. 標準 PS リスト

ことわざ辞典調査法が PS リスト作成のための最適の方法であるけれども、それには重大な欠陥がある。この方法は、PS リストを作成するのに適した点数のことわざ辞典やことわざ集を入手できることを必須の条件としているが、日本語や韓国語の場合のようにその条件が満たされることはまれであると考えられるからである。十分な点数のことわざ辞典がない言語についてはこの方法は不可能であるから、方法の規格化・標準化を図ることができない。規格化されていない方法で作成された PS リストに基づいて比較を試みても、その結果の信頼性を保証することはできない。したがって、比較ことわざ学の方法論の要として PS リストを位置づけるためには、標準化が可能な PS リスト作成方法を開発しなければならない。

どの言語のことわざにも適用できる標準化された方法で作成された PS リストを「標準 PS リスト」(Standardized PS List)と呼ぶことにしよう。ことわざ辞典調査法には上述のように致命的な欠陥があるが、その長所を活かした標準 PS リストを考案することが可能である。ことわざ辞典調査で必要としている情報は、どのようなことわざが収録されているかだけである。発想を換えれば、例えば1,000件規模の辞典は、「重要と思われることわざを1,000件選んでください。」というアンケートに対する回答であるとみなすことができる。この発想に基づいて、鄭芝淑(2007)は、標準 PS リスト作成の方法として、ことわざ辞典編纂を模したアンケート調査法を提案した。その青写真は次のようなものである。

### (1) 目標とする PS リストは 1,500 件規模のものとする。

1,500件というのは日本と韓国のことわざの比較分析から経験的に妥当ではないかと判断される規模である。

### (2) 調査対象とすることわざを 3,000 件程度選択し調査リストを作成する。

この数値も、やはり日韓のことわざに関することわざ辞典調査の経験から判断されたものである。調査リストの作成は、適当と思われることわざ辞典を参照しながら、調査者が適宜調整すればよい。ただし、ことわざに異形がある場合にはそれを十分に整理し、代表形と考えられるものだけをリストに載せるようにする必要がある。

### (3) 調査協力者(回答者)には、ことわざについてよく知っていると考えられる人を選ぶ。

ことわざ研究者や50代以上の語学教師(国語教師、外国語教師)あるいは語学教師の経験者などが適当であると考えられる。ただし、ことわざに対する知識が充分にあると判断される人であれば年齢・職業は問わない。

(4) 調査協力者の数は、20 人程度とする。

人数が多いほど結果として得られる PS リストの信頼性は高くなるが、重み付け情報を得られるように工夫をすれば 20 人程度の回答者で十分に有効な度数分布を得ることができる。20 人以上であれば特に人数を特定する必要はない。

(5) 調査協力にかかる時間は、1 ヶ月程度とする。

調査項目が多く回答の負担が大きいため、良質の回答結果を得るためにはこの程度の時間的余裕が必要であろう。

(6) 調査は、与えられた調査リストに関する次の設問の形で行う。

① あなたがことわざ辞典の編纂者になったつもりで教えてください。200 件の最も基本的なことわざを集めた辞典を作るとすれば、リストの中のどれを選びますか。選んだことわざの該当の欄に数字の「4」を書き入れてください。選ぶ個数は正確に 200 個である必要はありません。10% 程度の差があってもかまいません。

なお、選びたいことわざが、リストに与えられたものと表現形式が異なる場合には、その形を備考欄に書いてください。これは以下の②、③、④に関しても同様です。

② 同じように、500 件規模の辞典を作るとして、①で選んだものの他に 300 個程度を選び、該当の欄に数字の「3」を書き入れてください。

③ 次に、1,000 件規模の辞典を作るとして、さらに 500 個程度を追加して選び、該当の欄に数字の「2」を書き入れてください。

④ さらに、③の辞典の増補版を作るとして、追加すべき 500 個程度を選び、該当の欄に数字の「1」を書き入れてください。ただし、追加すべきものが少ない場合は 500 個を大幅に下回ってもかまいません。

⑤ 調査リストに含まれていないことわざで、辞典に含めたいものがあれば、リストの末尾の追加欄にそのことわざとどの規模の辞典に含めるべきかを表す数字を書いてください。

⑥ その他、どのようなことでも備考欄に記入してください（選択しない理由など）。

⑦ この調査はことわざに対するあなたの知識を調べるためのものではありませんから、適当なことわざ辞典等を参照しながら回答してもかまいません。

この調査法によって、回答者が 20 名であれば、理論的には 81 段階の度数区分を持つリストが得られることになる。度数別のことわざの分布がどのようになるかはやってみ

なければわからないが、1,500件規模のPSリストを作成するには十分に適切な結果が得られるものと予想される。調査項目が多く回答協力者への負担は大きいけれども、どの文化のことわざに関しても可能な方法である。手順の細部に関しては様々な異論があると予想されるが、この作成方法にとって重要なことは手順の規格化・標準化である。異なる手順で作成されたPSリストは、比較結果の信頼性の低下を招くことになる。

この調査法に基づいて世界の様々な文化のことわざに関して標準PSリストが作成されれば、個々の文化のことわざ研究の客観性を高めることになるばかりでなく、世界のことわざ研究者がPSリストを共有することにより、従来には得られなかった客観性・信頼性を持って異なる文化のことわざ比較が行われることになると考えられる。

本稿を閉じるに当たって、表題のことわざミニマムとことわざスペクトルの関係について付言しておきたい。図1のようにことわざスペクトルを捉えれば、ことわざミニマムはスペクトルの中核部分に相当すると考えるのが最も単純明快な解釈であろう。基本的にはそれでよいと思われるが、これら2つの概念は異なる動機付けを持って発想されたものであるから、ことわざの中核部分に相当するとみなされるPSリストの最も度数の高い部分を切り取ったものがことわざミニマムである、とすることは適切ではない。ことわざスペクトルおよびその写しとしてのPSリストは、ことわざ比較を目的として発想されたものであるのに対して、ことわざミニマムは文化リテラシーの尺度の一環として位置づけられ、また、言語教育への応用という指向性を持つものである。したがって、ことわざミニマムを選定するためには、ことわざの「現在性」「使用頻度」「認知度」に関する調査やあるいは教育上の諸要件などを加味することになるであろう。しかし、その場合にもPSリストが最初の絞り込みのための重要な道具立てになることには変わりがない。PSリストの効用については今後の研究に俟たなければならないが、ことわざミニマムの選定もその一つに数え上げることができよう。

## 註

- 1) 本稿は、鄭芝淑(2004a)が提唱した比較ことわざ学の枠組みを、鄭芝淑(2007)及びそれに先行する一連の論文で考察したことに基づいて、再構築するものである。
- 2) Doctorによれば、Gujarati語の使用人口は約5,000万人(インドで第6位、世界で20位)、インドのGujarat州の公用語でもある。
- 3) 『故事・俗信・ことわざ大辞典』(小学館、1982年)。ただし、表題からもわかるように純粋のことわざ以外の表現も収められている。ことわざの定義にもよるが、純粋のことわざに限っても数千件のことわざを含んでいると考えられる。
- 4) 図中の「中核ことわざ」「基本ことわざ」「重要ことわざ」「周辺ことわざ」の名称は便宜的な

ものである。おおよそ次のようなことわざ群であると考えればよい。

中核ことわざ：ほとんど誰でも知っていて、よく使われることわざ。

基本ことわざ：多くの人が知っていて、比較的よく使われることわざ。

重要ことわざ：ある程度の人知っていて、たまに使われることわざ。

周辺ことわざ：ほとんどの人が知らないし、使われることもほとんどないことわざ。

- 5) その理由について詳しくは鄭芝淑（2007）第2章および鄭芝淑（2004a）を参照されたいが、簡単に述べれば、使用頻度調査や想起度調査では結果として得られる度数分布に極端な偏りがあるため比較のために適切な段階区分を持つPSリストが得られないからである。

## 引用文献

- 鄭芝淑（2004a）「ことわざに関する対照研究の新しい試み—レベル別ことわざリストの作成とその応用—」『多元文化』第4号，名古屋大学国際言語文化研究科国際多元文化専攻，pp.105-117
- （2004b）「10分間想起式アンケートによる日韓のことわざ調査」『ことわざ』第3号，ことわざ研究会，pp.(24)-(33)
- （2004c）「日本と韓国のことわざ共感度調査」『ことばの科学』第17号，名古屋大学言語文化研究会，pp.237-256
- （2005a）「日本と韓国のことわざ認知度—ことわざスペクトル・リストに基づく調査」『多元文化』第5号，名古屋大学国際言語文化研究科国際多元文化専攻，pp.241-252
- （2005b）「韓国語能力試験問題のことわざ」『ことばの科学』第18号，名古屋大学言語文化研究会，pp.181-200
- （2006）「日本と韓国のことわざの特徴 —暫定PSリストに基づく分析—」『多元文化』第6号，名古屋大学国際言語文化研究科国際多元文化専攻，pp.57-68
- （2007）『日本と韓国のことわざの比較研究 —ことわざスペクトルと比較ことわざ学—』（名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士学位論文）
- Doctor, Raymond (2005) Towards a Paremiological Minimum For Gujarati Proverbs, *Proverbium*, 22, pp.51-70.
- Finnegan, Ruth (1994) Proverbs in Africa, In *The Wisdom of Many: Essays on the Proverb*, ed. by Wolfgang Mieder & Alan Dundes, The Univ. of Wisconsin Press, pp.10-42.
- Hirsch, E. D., Kett, Joseph & Trefil, James (1988) *The Dictionary of Cultural Literacy: What Every American Needs to Know*. Boston: Houghton Mifflin Company.
- Lau, Kimberly J. (1996) “It’s about time”: The Ten Proverbs Most Frequently Used in Newspapers and Their Relation to American Values, *Proverbium*, 13, pp.135-159.
- Mieder, Wolfgang (1994) Paremiological Minimum and Cultural Literacy, *Wise Words: Essays on the Proverb*. New York: Garland Publishing, pp.297-316.
- （2004）*Proverbs: A Handbook*. Greenwood Press.
- Permiakov, Grigorii L’vovich (1989) On the Question of a Russian Paremiological Minimum, *Proverbium*, 6, pp.91-102.
- Tóthné Litovkina, Anna (1996) Conducting a Paremiological Experiment in Hungary, *Proverbium*, 13, pp.161-183.

言語文化論集 第Ⅷ卷 第1号

Whiting, B. J. (1989) *Modern Proverbs and Proverbial Sayings*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.